

〔平成二三年度哲学会春季大会 講演要旨〕

哲学者としてのソフィスト

—ゴルギアスの場合—

中澤 務

ソフィスト（ギリシア語ではソフィステス）とは、紀元前五世紀におけるギリシア古典文化の最盛期に、アテナイを中心にギリシア世界で活躍した進歩的知識人の総称である¹⁾。彼らは出身地も経歴も活動内容も多様であるが、その活動は、紀元前五世紀の思想や教育に大きな影響を与えた。

「ソフィスト」という名称は、現在では「詭弁家」を意味するものとなり、否定的な意味合いで使用されることが多いが、そのような意味合いが生じたのは、その後の紀元前四世紀におけるプラトンによる痛烈な批判の影響によるところが大きい。すなわち、プラトンによる一連の批判を通して、ソフィストの思想・活動は哲学の対極に位置づけられ、ソフィストは虚偽を語る者、金銭のために教育をする者であるというイメージが形成されることになったのである。

哲学者としてのソフィスト—ゴルギアスの場合—

しかし、このようなイメージは、必ずしも、ソフィストの実像を正確に描き出すものとはいえない。プラトンの批判は、確かにソフィストたちの思想と活動が持つ危うい側面を映し出すものであったが、見逃されている側面もたくさん存在しているからである。その中でも筆者が注目するのは、ソフィストたちが当時の哲学的論争において果たした重要な役割である。筆者は、ソフィストたちもまた紀元前五世紀における哲学的論争において大きな役割を果たしており、それ以前の哲学を批判的に継承しつつ、新しい思想の流れを生み出していった思想家として評価することができる。

ソフィストたちの活動を以上のような新しい視点から正当に再評価するためには、従来のステレオタイプ的なソフィスト像に惑わされずに、残存する資料を正確に解釈し、できるだけ客観的で妥当な評価をしていく必要があるだろう。欧米では、一九世紀以降、このような再評価の動きが続いている。ソフィストの再評価のさきがけとなったのはグロート (G. Grote) である。彼は、著名な『ギリシア史 (History of Greece)』の中で、紀元前五世紀におけるソフィストの活動の意味を認め、その復権を図った。そしてこれ以降、欧米ではさまざまな研究が発表されてきたのである⁽²⁾。他方、わが国に目を向けると、研究は極端に少ないのが現状である⁽³⁾。このような研究不足ゆえに、わが国では、依然として、ソフィストへの誤解と過小評価が存在しているように思われる。われわれは、欧米での研究成果を継承しつつ、新しいソフィスト像の模索をしていく必要があるだろう。

本報告では、代表的ソフィストの一人であるゴルギアスを取り上げ、その著作『へあらぬもの』について、あるいは自然について』が持つ哲学的意味を考察したい。ゴルギアスは弁論術の理論家であり、哲学とは関係が薄いと考える見方が一般的である。しかし、この著作の内容を分析すると、そこには哲学的意図があることがわかるのである。

※

『あらぬもの』について、あるいは自然について』(以下、『あらぬもの』について)の原テキストは現存しない。われわれに伝えられているのは、偽アリストテレス文書『メリッソス、クセノファネス、ゴルギアスについて』の最後の部分(979a12-980b21)と、セクストス・エンペイリコス『諸学者論駁』VII章95a8節において伝えられている、その内容の要約的な紹介である⁴⁾。二つのテキストのうち、偽アリストテレスのほうはテキストが安定しておらず、破損箇所も多い。他方、セクストス・エンペイリコスのテキストは、比較的安定しているものの、その後の時代の語彙の混入が見られ、原テキストとかけ離れている部分もあると推定される。これら二つのテキストから、どのように原テキストを再構成するかは重要な研究課題であるが、ここではそれを詳しく論じる紙幅はない。そこで、テキストの再構成に関する詳しい考察は別の機会にまわし、筆者の推測するテキストの内容を前提して考察を進めていくことにしたい。

さて、原テキストでは、まず冒頭に三つのテーゼが提示され、それらが順に証明されていく構成になっていたと考えられる。三つのテーゼとは、次のようなものである。

- (1) 何も「ある」とはいえない⁵⁾。
- (2) もし何か「ある」といえたとしても、それを知ることができない。
- (3) もし何か「ある」といえて、それを知ることができたとしても、それを他の人に伝えることはできない。

ここで「ある」と訳したギリシア語の動詞は、伝統的に「存在する」の意で解釈され、ゴルギアスはここで、世界には何も存在せず、存在してもそれは人間に不可知で伝達不可能だというニヒリズムの思想を提示していると考えられてきた。しかし、ゴルギアスがニヒリストであつた証拠はなく、このような解釈は、彼の真意を理解しない曲解であろう。では、彼の意図は何だつたのであろうか。それを理解するためには、われわれは、これらのテーゼをエレア派の哲学に対する批判として理解しなければならぬ。

『あらぬもの』について』は、ゴルギアスの初期の著作であると考えられる。その時代、哲学の論争の中心の一つが、ゴルギアスと同じく南イタリアを拠点としていたエレア派であつた。その創始者であるパルメニデスは、著名な哲学詩『自然について』において、〈ある〉の概念を中心にした論理的探求を展開している。二〇世紀前半までは、パルメニデスの語る〈ある〉は「存在」であり、彼は「あるものはあり、あらぬものはあらぬ」という同語反復的前提から、存在の絶対性を説いたとされるのが通説であつた。しかし、現在の主流的な理解は、これとは異なる⁶⁾。それによれば、ここでの〈ある〉とは、「存在」ではなく、「繫辞(コプラ)」（〜である）あるいは「真理」（ほんとうに〜である）をあらわしている。そして、パルメニデスは、理性的思考は「〜である」という肯定的表現を通してのみ可能であり、「〜であらぬ」という否定的表現を通しては不可能であるという論理的方法論を確立した後、その方法論を通して到りつく対象を探求している。それは、「〜である」という規定を絶対的に満たし、「〜であらぬ」という規定を受け入れられないような究極的な探求対象であり、パルメニデスによれば、それは生成も消滅も運動もしない、完全な球体になぞらえられるべき対象なのである。

以上に加えて、われわれは、このようなパルメニデスの論理的探求論が、人間の持つ理性的思考力やそれを伝達する言語への信頼の上に成り立っていることを見逃してはならない。パルメニデスによれば「思惟することとあること

は同じ(断片3)であり、「語られかつ考えられうるものはあらねばならない(断片6)」のである。すなわち、パルメニデスの方法論が成り立つのは、人間の理性が言葉によつてそのようなものを探求しうるがゆえなのである。

以上のように考えれば、ゴルギアスのテーゼ(1)〜(3)は、パルメニデスの哲学の根本的前提に関わり、それを否定しようとするものであることがわかる。すなわち、ゴルギアスは、(1)において、パルメニデスの主張するような「である」という規定だけを絶対的に満たすような対象はありえないと主張し、(2)(3)においては、人間の理性がそれを思考と言葉によつて達成できるといふ主張を否定しようとしているのである。

ゴルギアスの一連の議論はエレア派の哲学を念頭に置いているという指摘は昔からなされてきたものであり、珍しいものではない。しかし、従来の解釈は、それを、エレア派に対するパロディーと考える傾向が強かった。しかし、そうであろうか。むしろ、筆者には、ゴルギアスの議論は、エレア派の哲学に対する真剣な哲学的対話であるように思われるのである。

このような解釈を支持するテキスト上の証拠は多い。まず、(1)のテーゼの論証は、従来考えられてきた以上に、エレア派の前提に乗った上での対人論法として理解できる。そこでゴルギアスは、「あるもの」が生成するものか、生成しないものかのいずれかである、あるいは、「あるもの」は、一であるか多であるかのいずれかである」といった前提を立て、「あるもの」がそのいずれでもありえないことを、同時代のエレア派の哲学者であるメリッソスとゼノンの哲学の概念を利用して論証していく。ゴルギアスは、エレア派の論理を理解し、その内部に潜む矛盾を、対人論法を通して暴露しようとしているのである。

(2)(3)のテーゼについても、ゴルギアスの議論は真面目なものである。(2)では、彼は、「あるもの」と思考の対象が必ずしも一致しないことを、「海原を走る戦車」のような偽なる思考の対象を例にあげて、明らかにしよう

とする。また(3)では、彼の経験主義的立場から、言葉が実在の姿をそのまま伝達するものではないことを明らかにしようとする。これらのゴルギアスの議論は、彼の経験主義的な立場からなされた、エレア派の知識・言語観への哲学的な反論として理解することができる。

以上のように、われわれは、『あらぬもの』について『を、ゴルギアスがエレア派に対して投げかけた真剣な哲学的批判として理解することができる。ゴルギアスは、紀元前五世紀における哲学的論争の渦中にいたのである。』。

- (1) ソフィストと呼ばれる人物は、この時期以降にも存在したし、ローマ時代には、弁論術復興の運動家たちがこの名で呼ばれていた。しかし、ここでは、紀元前五世紀の思想家たち(いわゆる「古ソフィスト」)に限定して、この名を使用する。この時代の代表的ソフィストは、プロタゴラス、ゴルギアス、ヒッピアス、プロディオコス、アンティフォン、トラシマコスなどである。
- (2) 代表的な研究を挙げると、M. Untersteiner, *I Sofisti* 2nd. ed, Milano, 1967, W. K. C. Guthrie, *The Sophists*, Cambridge, 1971, G. B. Kerferd, *The Sophistic Movement*, Cambridge, 1981, J. de Romilly, *Grands Sophistes dans l'Athène de Périclès*, 1991 などがある。
- (3) 二〇世紀において、日本におけるソフィスト研究といえは、田中美知太郎『ソフィスト』、弘文堂、一九四一年(一九七六年に講談社学術文庫)を挙げる事ができるくらいであった。しかし、二〇世紀に入り、納富信留『ソフィストとは誰か?』、人文書院、二〇〇六年が刊行されるなど、ソフィストに関する関心は徐々に高まっているといえるだろう。
- (4) これらのテキストの校訂は多数あるが、信頼できる代表的な校訂として、T. Buchheim, *Gorgias von Leontinoi: Reden, Fragmente und Testimonien*, Felix Meiner, 1989 を挙げておく。
- (5) これは「通常は『何も存在しない』と訳されることが多い。しかし、以下で論じられるように、そのような訳は誤解にもとづく誤った訳だと考えられる。同じことは、(2)(3)の訳についてもいえる。

- (6) 代表的な研究として、A. P. D. Mourelatos, *The Route of Parmenides*, Yale U. P., 1970 を挙げておく。
- (7) 同様の発想は、断片2や断片8にも見られることである。
- (8) ここでも、テキストを詳しく論じる紙幅はない。詳細な研究は、後日発表する予定である。
- (9) では、ゴルギアスのこのような哲学的側面と、彼の活動の主要部分である弁論術の理論との関連はどのようなものであろうか。筆者は、ゴルギアスの弁論術の思想の背後には、彼独自の反エレア派的言語観が存在しており、筆者はそれを彼のもう一つの代表作である『ヘレネへの賛歌』の中に読み取ることができると考えているが、この点を巡る考察についても、別の機会に譲ることにしたい。